

S-HTPP (Synthetic House Tree Person Person test) の基礎的研究

中京大学心理学研究科 近藤 孝司^{注1}

A fundamental study on S-HTPP (Synthetic House Tree Person Person test)

KONDO, Takashi (Graduate School of Psychology, Chukyo University)

The Synthetic House Tree Person Person (S-HTPP) test is a drawing method that assesses relationships between the following items drawn on one sheet of paper: a house, a tree, a male, and a female. The present paper focuses on male and a female drawings, which symbolize representations of the self and others, and investigates the rate of occurrence of these figures in S-HTPP. The results were compared to those of Synthetic House Tree Person (S-HTP) test and Mother and Child Drawings. Subjects were 227 university students and graduate students. The results of this study provide information for future S-HTPP studies.

Key words: S-HTPP, adolescence, fundamental study

問題

描画法は、「何らかの目的をもって、被検者に鉛筆やクレヨンなどを与え、紙上に何かを表現させる心理テスト」(高橋, 1974)と定義される、表現の自由度の高い心理テストである。何をどのように描くかによって、投射される人格の側面は大きく異なり、この特徴を活用して、多くの技法が提案されてきた。その一つに人物画を課題としたものがある。

人物画は、描画法の中で、最もポピュラーで親しみのある描画の題材の一つであり、その豊かな象徴性から、これまで多くの研究がされてきた。人物画を心理検査として用いようとしたのが、Machover (1949) の DAP (Draw-A-Person) の研究である。まず画用紙に人物像を描かせ、もう一枚の画用紙にその反対の性別の人物像を描かせる技法である。描き手と同性の人物画には主に自己像、異性の人物画には性同一性や異性への態度が表れるとされている。また人物画の各部分は、様々な人格的側面を反映していると考えられている (Machover, 1949)。例えば、顔は社会や外界に関する態度、口は依存性や甘え、手は外界への接触手段を表すといった解釈仮説が提案されている。DAP 以外に人物画を応用した技法に、母子画 (Gillespie, 1994)、人物二人法 (安藤, 1990)、家族画 (Hulse, 1952)、学校画

(Knoff & Prout, 1985) がある。

母子画は、「母親と子ども」を描く技法で、母子像のやりとりに原初的な対象関係が投射されると考えられており、今までに基礎的・臨床的な検討が行われている (馬場, 2005; 松下・石川, 1999)。人物二人法は、「一枚の画用紙に二人の人物と背景」を描く描画法である。描かれた二人の人物には、自己と他者の役割関係や現実の対人関係場面が表現されるとされ、治療技法としても有用であると示唆されている (安藤, 1990)。家族画は、「本人を含めた家族」を描く技法で、家族のなかでの描き手の位置づけ、家族イメージなど、家族に関するアセスメントをする上で有用である。学校画は、「描き手・友人・先生のいる学校場面」を描く技法で、学校や先生のイメージ、学校における自己像といった学校場面に関するアセスメントに適した技法である (橋本, 2004; 田中, 2007)。このように、同じ人物画でも、人物像の属性や場面設定を変化させることで、投射される人格的側面は大きく変化する。また、上記の諸技法は、一枚の画用紙に二人、またはそれ以上の人物像を描く技法である。そうすることで、一方が相手にどのような表情と働きかけをしているか、それに相手はどう反応しているか、人物像同士はどういう関係かといった表現が必要となり、そこに描き手の関係性に関する考えが表れる。例えば、人に臆病で引っ込み思案の者なら、消極的な相互作用の表現が、人に肯定的感情を抱き、適応的な対人関係能

注 azure_peaks@yahoo.co.jp

力の者なら、積極的な相互作用の表現がされやすいであろう。つまり、一枚の画用紙に複数の人物像を描く技法は、描き手の関係性をアセスメントする上で有用な技法であるといえる。

一方、人物画以外に、家屋画と樹木画を描くHTP (House-Tree-Person test) (Buck, 1948)がある。それぞれの画用紙に「家」・「木」・「人」を描く技法で、家は家庭や環境への態度、木は無意識水準の自己像、人は意識水準の自己像を象徴すると考えられている。三つの描画を解釈することで、より多層的なアセスメントが可能になる。このHTPの応用型に、高橋 (1974) のHTPP (House-Tree-Person-Person test)がある。HTPPは、「家」・「木」・「人」・「反対の性の人」を描く技法である。描き手と同性・異性の人物像をそれぞれ描くことで、異性への関心や性同一性をアセスメントに含めることが可能になる。またHTPの「家」・「木」・「人」を一枚の画用紙に描くS-HTP (Synthetic-House-Tree-Person test)がある。「家」・「木」・「人」をどのように統合させるかに注目する技法で、統合の程度に精神発達水準が表れるとされている (三上, 1995)。

近藤 (2005, 2006) は、特定の場面と他者に制限せず、描き手の対象関係をアセスメントする技法として、S-HTPとHTPPを統合させたS-HTPP (Synthetic-House-Tree-Person-Person test)を提案した。これは、一枚の画用紙に「家・木・男性・女性」を描く技法である。このS-HTPPの特徴は、描画課題を一枚の画用紙に描くこと、人物像の設定が「男性」と「女性」だということである。描き手と同性の人物像は自己像を、異性の人物像は他者像や異性像を象徴すると多くの研究者は提唱している (Koppitz, 1968; Machover, 1949; 高橋, 1974)。自己と他者との関係性をアセスメントする上で、同性像と異性像は適切な課題であると考えられる。また、母子画と家族画のように人物像の属性と場面設定を限定するのではなく、できる限り曖昧にすることで、描き手の対象関係を自由に表現することが可能となる。さらに、それらを一枚の画用紙に描くことで、人物像の関係性、情緒的な距離、雰囲気などが表現され、量的にも質的にも豊かな情報が得られる。家と木についても、描き手のパーソナリティを理解する上で有用な材料になる。

筆者はこれまで、青年期の大学生を対象に、S-HTPPの描画特徴と対象関係との関連を検討した

(近藤, 2005, 2006, 2007)。その結果、表情と視線、描画後の質問 (Post Drawing Interview: 以下PDI) に対象関係が反映されることが明らかになった。今後、S-HTPPに表現されるものを検討する上で、S-HTPPの基礎的なデータが必要である。一般健常者において標準的な、あるいは出現頻度の稀な描画表現を検討することで、臨床への応用、発達の検討などが可能になると考えられる。本研究は、人物像に焦点を置き、一般健常者におけるS-HTPPの描画特徴の出現率を検討し、あわせてS-HTP・母子画との比較を行う。

方法

調査協力者 A県内の大学の大学生・大学院生227名 (男性84名, 女性143名, 平均年齢21.0歳, $SD \pm 3.4$)。

描画法 S-HTPP。「この一枚の画用紙に、家と木と男性と女性をいれて、何でも好きな絵を描いてください」という指示で実施した。棒人間でもいいか、何人でもいいかなどの質問があれば極力「自由でかまいません」と回答した。

実施 2005年7月から10月、調査協力者に同意と理解を得た上で、講義後に集団式で行った。S-HTPPはB4の鉛筆、消しゴム、A4の画用紙を用意し、画用紙を横向きに置いた状態で実施し、その後、PDIの質問紙を配布した。PDIには「この男性/女性の絵を描いていて誰かを思い出しましたか? 自分でもかまいません」「この男性/女性は今、何をしていますか?」「この男性/女性は何を考えていますか? 今の気持ちは何ですか?」「男性/女性は相手に、どんな気持ちや考えを抱えていますか?」「この男性と女性はどういう関係ですか?」という、男女の関係性、男女の人物像のモチーフ、行為、感情と思考、相手への感情と思考を尋ねる質問項目が含まれている。

分析項目 分析項目として、全体的特徴、人物像の特徴、PDIで捉えた人物画の説明を設定した。全体的特徴はS-HTPとの比較が可能のように、三上 (1995) の分析項目を参考にした。人物像の特徴については母子画との比較が可能のように、馬場 (2005) の分析項目を参考にした。

以上の項目のうち、共同の評定者を必要とする項目を分析項目A (Table 1) とし、著者と大学院生1名とで個別に評定した。一致しない項目は協議の上、

再度評定した。一人の評定者で評定を行う項目を分析項目 B (Table 2) とし、著者が単独で評定した。「表情」「顔の向き」「モチーフ」「人物像の行為」「人物像の感情・考え」「相手への感情・考え」については、描き手と同性像、異性像、同性像-異性像の三つについて評定した。

項目 A のうち、「統合性」は、それぞれの課題がどのように統合的に描かれているかをみる項目である。「明らかに統合的」は、四つの課題が全て何らかの関連をもって描かれ、「やや統合的」は、二つ以上の課題が何らかの関連をもって描かれていることを指す。「媒介による統合」は、地面や山といったもので課題同士の関連が描かれており、「羅列的」は、それぞれの課題同士の関連はなく、羅列的に並べられている表現である。項目 B のうち、「人物像の表現様式」の「普通」は、髪や顔、服装が描かれ、一部に簡略化がされても、「棒人間」・「空白」ではない現実的な人物像を指す。「人物像の表現様式」

の下位項目の例を Figure 1 から Figure 3 に示す。PDI で捉えた人物画の説明について、「モチーフ」は誰を題材にして人物像を描いたかの項目である。

結果と考察

1. 全体的特徴

まず全体的特徴についてである。Table 3 に各分析項目の度数と出現率、「統合性」、「付加物」、「付加物の内容」の項目には、大学二年生における S-HTPP での出現率 (田畑, 2006) を併記した。

「統合性」について、調査協力者の 42.3% が「明らかに統合的」な S-HTPP を描き、「やや統合的」、「媒介による統合」、「羅列的」についてはそれぞれ 20% 前後の出現率が示された。約 8 割以上の調査協力者が、描画課題の統合された S-HTPP を描くことが明らかになった。S-HTPP との比較では、「明らかに統合的」では両者は似た数値で、「やや統合的」

Table 1 分析項目 A

全体的特徴	統合性	明らかに統合的、やや統合的、媒介による統合、羅列的
	付加物	あり、なし
	描線	途切れのない一本線、一本線と複数線の混合、複数線
	筆圧	強、適切、弱
人物像の特徴	画面の使用	全体的、部分的、4分の1以下
	表情	笑顔、非笑顔、空白

Table 2 分析項目 B

全体的特徴	付加物の内容	山、道、草花、囲い、門、雲、太陽、動物、虫、鳥、チョウ、乗り物、川、田畑、池、踏み石、果物、椅子・机
人物像の特徴	顔の向き	正面向き、横向き、後ろ向き
	アイコンタクト	対面式、同じ方向、一方向、別方向
	身体接触	抱く、手をつなぐ、接触なし
	人物像の表現様式	普通、棒人間、空白
PDI指標	発達段階	幼児・児童期(0~12歳)、思春期(13~18歳)、青年期(19~22歳)、成人・壮年期(23~60歳)、老年期(60歳~)、その他・不明
	関係性	夫婦・恋人、友達、きょうだい、親子、知り合い・近所の人、言及なし
	モチーフ	自分、現実の人物、空想の人物、理想の人物、なし
	人物像の行為	散歩、会話、遊んでいる、のんびりしている、家事・仕事、帰宅・家を出る、見送り、立っている・見ている、日向ぼっこ、待ち合わせ、抱擁
	人物像の感情・考え	楽しい・嬉しい、おだやか、愛情・幸せ、葛藤、Negativeな感情、具体的な思考、なし
	相手への感情・考え	愛情・感謝、友情、なし・存在を認識、具体的な思考、Negativeな感情、葛藤



Figure 1 「普通」

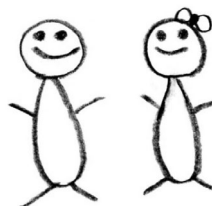


Figure 2 「棒人間」

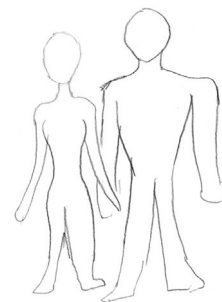


Figure 3 「空白」

では S-HTPP の方が低く、「媒介による統合」と「羅列的」では S-HTPP の方が高いという結果が示された。S-HTPP は S-HTP より、統合の弱い、羅列的な描画表現になる傾向が示された。家・木・人の三つの課題からなる S-HTP に比べ、S-HTPP は家・木・男性・女性の四つの課題を描く技法である。そのため S-HTPP の方が、課題同士をどのように統合させるかという点で、心理的な負担がかかり、羅列的な表現になる傾向が示された。また S-HTPP は、描き手にとって描くことに抵抗を感じやすいとされる人物像を二つ描かなければならない。このことも、羅列的な傾向になる一つの要因なのかもしれない。

Table 3 S-HTPP 全体的特徴の度数・出現率と S-HTP との比較

		S-HTPP		S-HTP
		度数	%	%
統合性	明らかに統合的	96	42.3	46.7
	やや統合的	50	22.0	40.0
	媒介による統合	44	19.4	6.7
	羅列的	37	16.3	6.7
付加物	あり	169	74.4	63.3
	なし	57	25.1	36.7
付加物の内容	山	10	4.4	3.3
	道	45	19.8	20.0
	草花	73	32.2	33.3
	囲い	19	8.4	0.0
	門	1	0.4	0.0
	雲	23	10.1	20.0
	太陽	30	13.2	30.0
	動物	32	14.1	16.7
	虫	4	1.8	3.3
	鳥	18	7.9	10.0
	チョウ	0	0.0	3.3
	乗り物	0	0.0	3.3
	川	4	1.8	3.3
	田畑	1	0.4	6.7
	池	6	2.6	-
	踏み石	7	3.1	-
	果物	29	12.8	-
	椅子・机	19	8.4	-
	描線	途切れのない一本線	165	72.6
一本線と複数線の混合		36	15.9	
複数線		26	11.5	
筆圧	強	28	12.3	
	適切	178	78.4	
	弱	21	9.3	
画面の使用	全体的	199	87.7	
	部分的	23	10.1	
	4分の1以下	5	2.2	

S-HTP のデータは田畑 (2006) から引用した

「付加物」では、調査協力者の 74.4% が何らかの付加物を描いた。その内容は「草花」(32.2%)、「道」(19.8%)、「太陽」(13.2%)が多かった。S-HTP と比較すると、「囲い」が多く、「雲」、「太陽」、「田畑」が少ないという結果が示された。「描線」については、「途切れのない一本線」が 72.6%、「複数線」が 11.5%と示され、単純な一本線で描かれることが多いと示された。「筆圧」では「適切」なものが 78.4%と最も多く、「画面の使用」では「全体的」に使う者が 87.7%に達した。

S-HTPP にとって標準的な表現は、四つの課題が統合的に配置され、「草花」や「道」、「果物」といった付加物が描かれ、適切な筆圧の一本線で、画

Table 4 S-HTPP 人物像の特徴の度数・出現率と母子画との比較

	S-HTPP				母子画
		度数	%	%	
表情 (同性像)	笑顔	101	46.1		
	非笑顔	53	24.2		
	空白	65	29.7		
表情 (異性像)	笑顔	94	43.1		
	非笑顔	59	27.1		
	空白	65	29.8		
表情*1 (同性像-異性像)	笑顔 笑顔	86	40.2	58.8	
	笑顔 非笑顔	14	6.5	11.6	
	非笑顔 笑顔	7	3.3		
	非笑顔 非笑顔	43	20.1	12.8	
	非笑顔 空白	1	0.5	0.6	
アイコンタクト	空白 非笑顔	1	0.5	1.1	
	空白 笑顔	1	0.5	1.1	
	空白 空白	61	28.5	10.7	
	対面式	37	20.7	21.2	
身体接触	同じ方向	106	59.2	-	
	一方向	8	4.5	19.7*2	
	別方向	28	15.6	-	
人物像の表現様式	抱く	2	0.9	22.8	
	手をつなぐ	58	25.6	54.9	
	接触なし	167	73.6	21.2	
顔の向き (同性像)	普通	183	80.6		
	棒人間	33	14.5		
	空白	11	4.8		
顔の向き (異性像)	正面向き	146	74.5		
	横向き	42	21.4		
	後ろ向き	8	4.1		
顔の向き (同性像-異性像)	正面向き	138	69.7		
	横向き	51	25.8		
	後ろ向き	9	4.5		
顔の向き (同性像-異性像)	正面向き 正面向き	133	68.2		
	正面向き 横向き	14	7.2		
	正面向き 後ろ向き	3	1.5		
顔の向き (同性像-異性像)	横向き 横向き	37	19.0		
	横向き 後ろ向き	3	1.5		
	後ろ向き 後ろ向き	5	2.6		

母子画のデータは馬場 (2005) を改変・引用した

*1 表情における母子画の数値は、母親像・子ども像の出現率の合計

*2 「母→子」と「子→母」の出現率の合計

用紙の全体を使って描かれるという描画表現であると示された。

2. 人物像の特徴

人物像の特徴の度数と出現率を Table 4 に示す。描き手の同性像は自己像を、異性像は他者像を象徴するとされるため、「表情」、「顔の向き」は、描き手の同性像と異性像とに分け、さらに同性像-異性像の組み合わせを示した。「表情」、「アイコンタクト」、「身体接触」については、大学生における母子画での出現率(馬場, 2005)を併記した。「表情」に関して、母子画では母子のどちらが自己像の象徴であると明確にされていないため、同性像-異性像のみにとどめた。

「表情」について、同性像と異性像のそれぞれは、似た数値を示し、「笑顔」が半数近く、「非笑顔」と「空白」がそれぞれ 25%前後の出現率となった。同性像-異性像の組み合わせでは、「笑顔-笑顔」は、S-HTPP で 40.2%、母子画で 58.8%、「空白-空白」は、S-HTPP で 28.5%、母子画で 10.7%を示した。S-HTPP は母子画より、「笑顔」が少なく、「空白」の多い表情が描かれる傾向が示された。この要因に、描画課題の数と人物像の設定が挙げられる。S-HTPP の描画課題は、母子画よりも多く、必然的に人物像のサイズが小さくなる。そのため S-HTPP では、表情に関わる顔の細部の描写が簡略されやすく、「空白」の表情が多くなるのではないかと考えられた。また母子画と S-HTPP における人物像の設定は、「母子」と「男女」である。母子画の「母子」で描かれる母子関係は、それ自体が親密な関係性であり、「笑顔」が表現されやすい。しかし、S-HTPP の「男女」では、見知らぬ他人から恋人や夫婦といった様々な関係性が描かれ、「笑顔」の表現は少なくなる傾向になる。「表情」は描き手の対象関係に関する重要な指標である。どのような関係性の人物像を描くのに、「表情」の様相は変化するため、それを考慮したうえで解釈を進める必要がある。この「表情」では、同性像と異性像とで描画特徴が異なることが、合計で 11.3%みられた。母子画でも 13.3%とほぼ似た数値が示されている。同性像と異性像で描画特徴が異なることの意味は、それぞれの例に合わせて解釈する必要がある。

「アイコンタクト」では、人物像が「同じ方向」を向いていることが 59.2%と最も多かった。「対面式」は 20.7%と、母子画の 21.2%とあまり変わら

ない数値を示したが、「一方向」については、S-HTPP が 4.5%、母子画 19.7%と違いが見られた。母子画で「一方向」のアイコンタクトが多くなる理由として、眠っている子どもを見守る母親といった、養育者-被養育者の属性が与えられやすいということが考えられる。これに比べて S-HTPP は、男性と女性の教示に特定の属性が与えられることが少ないため、母子画より「一方向」が少ない結果になったのかもしれない。

「身体接触」について、「抱く」は S-HTPP で 0.9%だが、母子画では 22.8%と高い。「手をつなぐ」は S-HTPP が 25.6%で、母子画が 54.9%、「接触なし」では S-HTPP が 73.6%で、母子画が 21.2%であった。S-HTPP は、母子画よりも抱いたり、手をつないでいることが少なく、身体接触の表現があまりされない傾向があることが明らかになった。これも母親と子ども像が描かれるか、そうではないかの教示の違いが大きく影響している。

「人物像の表現様式」では、髪や服を描き、より現実の人間に近い人物像の描写である「普通」を 80.6%の者が描いた。

「顔の向き」においては、「表情」と同じように同性像と異性像では大きな違いが見られなかった。同性像-異性像の組み合わせでは、「正面向き-正面向き」が 68.2%と最も多く、次に「横向き-横向き」の 19.0%が多かった。また同性像と異性像とで特徴の異なる描画は、合計で 10.2%みられ、「表情」と同様に様々な意味を包含していると考えられる。

S-HTPP では、笑顔で、一緒に正面を向き、手をつながない、現実に近い形をした人物像が描かれることが最も多いことが示された。母子画との比較では、「表情」と「身体接触」で違いが顕著で、これは人物像に母親と子どもを描くか、それに限定していないかの違いが大きな影響を与えていると考えられる。

3. PDI で捉えた人物像の説明

PDI には、描き手を理解する上で重要な素材になるとされている(海塚, 2003)。本研究は、描き手が描画の人物像にどのような意味を与えたのかを検討するため、「発達段階」、「関係性」、「モチーフ」、「人物像の行為」、「人物像の感情・考え」、「相手への感情・考え」に関する質問を行い、度数と出現率を検討した。「モチーフ」、「人物像の行為」、「人物

像の感情・考え」,「相手への感情・考え」は,描き手の同性像,異性像,同性像-異性像のそれぞれを示す。

「発達段階」と「関係性」の度数と出現率をTable 5に示す。「発達段階」について,24.7%が「青年期(19~22歳)」の人物像を描いた。平均年齢21.0歳の調査協力者と同じ発達段階の人物像である。また47.6%が「成人・壮年期(23~60歳)」の人物像を描き,これから迎える発達段階への関心が表れているようである。「関係性」では,「夫婦・恋人」の62.6%が最も多く,次いで「友達」の12.8%,「きょうだい」の9.7%が多く,「親子」は0.4%と最も少なかった。異性関係が描かれることが多

Table 5 「発達段階」と「関係性」の度数・出現率

描画特徴	下位項目	度数	%
発達段階	幼児・児童期(0~12歳)	24	10.6
	思春期(13~18歳)	25	11.0
	青年期(19~22歳)	56	24.7
	成人・壮年期(23~60歳)	108	47.6
	老年期(60歳~)	2	0.9
	その他・不明	12	5.3
関係性	夫婦・恋人	142	62.6
	友達	29	12.8
	きょうだい	22	9.7
	親子	1	0.4
	知り合い・近所の人	21	9.3
	言及なし	12	5.3

Table 6 「モチーフ」の度数・出現率

描画特徴	下位項目	度数	%
モチーフ (同性像)	自分	64	28.2
	現実の人物	24	10.6
	空想の人物	20	8.8
	理想の人物	2	0.9
	なし	117	51.5
モチーフ (異性像)	自分	3	1.3
	現実の人物	75	33.0
	空想の人物	20	8.8
	理想の人物	3	1.3
	なし	126	55.5
モチーフ (同性像-異性像)	自分	45	19.8
	自分	3	1.3
	自分	16	7.0
	現実の人物	2	0.9
	現実の人物	19	8.4
	現実の人物	2	0.9
	現実の人物	1	0.4
	空想の人物	1	0.4
	空想の人物	14	6.2
	空想の人物	4	1.8
モチーフ (同性像-異性像)	理想の人物	2	0.9
	なし	10	4.4
	なし	1	0.4
	なし	1	0.4
	なし	105	46.3

く,パートナーとの関係,結婚といった異性への志向性の高さが表れているようである。

「モチーフ」の度数と出現率をTable 6に示す。同性像のモチーフは,51.5%の者が「なし」とし,28.2%の者が「自分」,10.6%の者が「現実の人物」とした。異性像については,55.5%が「なし」,33.0%が「現実の人物」とした。1.3%とごく少数の者が「自分」としていた。同性像-異性像の組み合わせについては,「なし-なし」が最も多く,次に「自分-現実の人物」と続いた。これらの結果は,人物像には自己像以外に様々なイメージが投影されるという高橋(1974)の知見を支持するものであると考えられる。また,同性像と異性像とで半数以上

Table 7 「人物像の行為」の度数・出現率

描画特徴	下位項目	度数	%	
人物像の行為 (同性像)	散歩	32	15.9	
	会話	21	10.4	
	遊んでいる	15	7.5	
	のんびりしている	23	11.4	
	家事・仕事	16	8.0	
	帰宅・家を出る	38	18.9	
	見送り	7	3.5	
	立っている・見ている	28	13.9	
	日向ぼっこ	12	6.0	
	待ち合わせ	6	3.0	
人物像の行為 (異性像)	抱擁	3	1.5	
	散歩	32	15.9	
	会話	20	10.0	
	遊んでいる	14	7.0	
	のんびりしている	22	10.9	
	家事・仕事	18	9.0	
	帰宅・家を出る	36	17.9	
	見送り	7	3.5	
	立っている・見ている	31	15.4	
	日向ぼっこ	12	6.0	
人物像の行為 (同性像-異性像)	待ち合わせ	6	3.0	
	抱擁	3	1.5	
	散歩	31	15.4	
	散歩	遊んでいる	1	0.5
	会話	会話	20	10.0
	会話	立っている・見ている	1	0.5
	遊んでいる	遊んでいる	12	6.0
	遊んでいる	立っている・見ている	3	1.5
	のんびりしている	のんびりしている	20	10.0
	のんびりしている	家事・仕事	1	0.5
	のんびりしている	立っている・見ている	2	1.0
	家事・仕事	のんびりしている	1	0.5
	家事・仕事	家事・仕事	15	7.5
	帰宅・家を出る	のんびりしている	1	0.5
	帰宅・家を出る	家事・仕事	1	0.5
	帰宅・家を出る	帰宅・家を出る	36	17.9
	見送り	見送り	7	3.5
	立っている・見ている	散歩	1	0.5
	立っている・見ている	遊んでいる	1	0.5
	立っている・見ている	家事・仕事	1	0.5
立っている・見ている		24	11.9	
立っている・見ている	日向ぼっこ	1	0.5	
日向ぼっこ	立っている・見ている	1	0.5	
日向ぼっこ	日向ぼっこ	11	5.5	
待ち合わせ	待ち合わせ	6	3.0	
抱擁	抱擁	3	1.5	

の者が、モチーフはないと答えたが、無意識のうち
に自己像や特定の誰かがモチーフになっている可能
性もある。

「人物像の行為」の度数と出現率を Table 7 に示
す。同性像、異性像ともに大きな差はみられなかつ
た。「帰宅・家を出る」、「散歩」、「会話」といった
日常的な活動が多く、「のんびりしている」、「立っ
ている」、「日向ぼっこ」といった静的で動きの少な
い描画表現もされる傾向が示された。母子画の研究
でも、「遊ぶ」や「会話」など日常的な行動が描か
れる傾向があると、S-HTPP と同様の結果が報告
されている (馬場, 2005)。また同性像と異性像で
特徴が異なることは、合計で 6.5% であり、ほとん
どの描画で同性像と異性像は共通の活動に従事して
いることが示された。この人物像の行為が一致して

いるかどうかは、描画解釈を行う上で重要な指標に
なると考えられる。

「人物像の感情・考え」の度数と出現率を Table 8
に示す。同性像、異性像、同性像-異性像の組み合
わせにおいて、「家に帰ろうとしている」や「献立
を考えている」といった「具体的な思考」が最も多
く、次いで「楽しい・嬉しい」、「愛情・幸せ」、「お
だやか」といった肯定的な感情が続いた。例えば、
「悲しい・さびしい」などの「Negative な感情」も
少ないながらも示された。同性像と異性像で特徴が
異なるものは、合計で 26.0% と、PDI の項目の中
では最も一致しにくい項目であると示された。

「相手への感情・考え」の度数と出現率を Table 9
に示す。同性像、異性像、同性像-異性像の組み合
わせにおいて、半数以上の調査協力者が「愛情・感

Table 8 「人物像の感情・考え」の度数・出現率

描画特徴	下位項目	度数	%	
人物像の感情・考え (同性像)	楽しい・嬉しい	60	26.4	
	おだやか	36	15.9	
	愛情・幸せ	39	17.2	
	葛藤	5	2.2	
	Negative な感情	8	3.5	
	具体的な思考	65	28.6	
	なし	14	6.2	
人物像の感情・考え (異性像)	楽しい・嬉しい	57	25.1	
	おだやか	39	17.2	
	愛情・幸せ	41	18.1	
	葛藤	1	0.4	
	Negative な感情	8	3.5	
	具体的な思考	65	28.6	
	なし	16	7.0	
人物像の感情・考え (同性像-異性像)	楽しい・嬉しい	楽しい・嬉しい	48	21.1
	楽しい・嬉しい	おだやか	7	3.1
	楽しい・嬉しい	愛情・幸せ	2	0.9
	楽しい・嬉しい	葛藤	1	0.4
	楽しい・嬉しい	Negative な感情	1	0.4
	楽しい・嬉しい	具体的な思考	1	0.4
	おだやか	楽しい・嬉しい	1	0.4
	おだやか	おだやか	25	11.0
	おだやか	愛情・幸せ	2	0.9
	おだやか	Negative な感情	2	0.9
	おだやか	具体的な思考	4	1.8
	おだやか	なし	2	0.9
	愛情・幸せ	楽しい・嬉しい	1	0.4
	愛情・幸せ	おだやか	2	0.9
	愛情・幸せ	愛情・幸せ	33	14.5
	愛情・幸せ	具体的な思考	3	1.3
	葛藤	愛情・幸せ	2	0.9
	葛藤	具体的な思考	2	0.9
	葛藤	なし	1	0.4
	Negative な感情	楽しい・嬉しい	1	0.4
Negative な感情	愛情・幸せ	1	0.4	
Negative な感情	Negative な感情	3	1.3	
Negative な感情	具体的な思考	3	1.3	
具体的な思考	楽しい・嬉しい	6	2.6	
具体的な思考	おだやか	5	2.2	
具体的な思考	Negative な感情	2	0.9	
具体的な思考	具体的な思考	49	21.6	
具体的な思考	なし	3	1.3	
なし	愛情・幸せ	1	0.4	
なし	具体的な思考	3	1.3	
なし	なし	10	4.4	

Table 9 「相手への感情・考え」の度数・出現率

描画特徴	下位項目	度数	%	
相手への感情・考え (同性像)	愛情・感謝	129	56.8	
	友情	43	18.9	
	なし・存在を認識	28	12.3	
	具体的な思考	15	6.6	
	Negative な感情	8	3.5	
	葛藤	4	1.8	
相手への感情・考え (異性像)	愛情・感謝	127	55.9	
	友情	45	19.8	
	なし・存在を認識	30	13.2	
	具体的な思考	13	5.7	
	Negative な感情	8	3.5	
	葛藤	4	1.8	
相手への感情・考え (同性像-異性像)	愛情・感謝	愛情・感謝	124	54.6
	愛情・感謝	友情	2	0.9
	愛情・感謝	なし・存在を認識	2	0.9
	愛情・感謝	具体的な思考	1	0.4
	友情	愛情・感謝	1	0.4
	友情	友情	40	17.6
	友情	なし・存在を認識	1	0.4
	友情	葛藤	1	0.4
	なし・存在を認識	愛情・感謝	1	0.4
	なし・存在を認識	友情	2	0.9
	なし・存在を認識	なし・存在を認識	23	10.1
	なし・存在を認識	具体的な思考	2	0.9
	具体的な思考	愛情・感謝	1	0.4
	具体的な思考	なし・存在を認識	4	1.8
	具体的な思考	具体的な思考	9	4.0
	具体的な思考	Negative な感情	1	0.4
	Negative な感情	具体的な思考	1	0.4
	Negative な感情	Negative な感情	7	3.1
	葛藤	友情	1	0.4
	葛藤	葛藤	3	1.3

謝」を示し、次いで「友情」が多かった。ほとんどの描き手が、もう一方の人物像に肯定的で情緒的な感情を示した。また、相手に向ける感情や考えの言及がされなかったり、存在を認識する程度の「なし・存在を認識」も多かった。同性像と異性像で特徴が異なるものは、合計で9.2%であった。

S-HTPPには、成人期・壮年期の夫婦・恋人の人物像が多く描かれ、愛情や幸せなど温かみのある感情を抱くことが多いと示された。これらの内容は、大学生・大学院生にとって親和的なテーマであるのかもしれない。PDIは、描画に描かれた描画特徴とは異なり、自分の描いた描画についての説明である。そのため文章完成法やロールシャッハテストのinquiry段階のように、その反応は意識水準に近いものである。描画での無意識水準の表現と、PDIでの意識水準の表現を総合することで、描き手のパーソナリティを多角的に捉えることが可能になると考えられる。

4. まとめ

本研究の目的は、青年期におけるS-HTPPの描画表現の様相を明らかにすることであった。本研究の結果から、S-HTPPに描かれる人物像の年齢や関係性、行為、感情は、描き手にとって、日常的で穏やかなものが多く、描き手の現在や体験している内的な世界が表現されているようであった。この基礎的研究で得られた知見は、今後のS-HTPPの研究、また人物像表現に関する研究に、何らかの知見を提供するものであるのかもしれない。

また本研究は、あわせてS-HTPや母子画との比較も行った。S-HTPとの比較から、描画課題の量と二人の人物像の描写という要因から、S-HTPPの方が、心理的負荷が強く、統合性が低下する傾向が認められた。母子画との比較では、人物像設定が限定的であるか曖昧であるかが、「表情」と「身体接触」の出現頻度に影響を与えた。この結果は、母子画とS-HTPPとで、投影される関係性の内容の違いを反映している。母子画は、愛着や母子関係に由来する原初的な対象関係が表れるとされる(Gillespie, 1994)。一方のS-HTPPは、どのような関係性を描くかは自由であり、本研究の知見に示されるように、描き手に近い世代や日常的な行為が描かれやすい。向き合っテーブルに座り、笑顔で会話し、手をつないでいない、恋人同士の青年期の男性と女性といったS-HTPPの表現は、平均年齢21.0

歳の調査協力者にとって、親和的で現在の心理状態が表れているようである。このようにS-HTPPには、母子画より、「今、ここ」に近い対象関係が表れると推測される。

本研究は、関係性に関する情報が多く含まれている人物像に焦点をおいて検討したが、家と木に関する知見はほとんど得られていない。家は家庭や家族の象徴、木は無意識水準の自己像を象徴するとされている。今後、家と木を視野に含めた検討を行い、本研究の人物像に関する知見とを統合することで、多角的な視点からS-HTPPを理解することが可能になると考えられる。また本研究の知見は、大学生・大学院生を対象にデータを収集したため、青年期に関する限定的なものである。今後は対象者の範囲を拡大し、さらなる検討をする必要があるだろう。

引用文献

- 安藤 治 (1990). 人物二人法 —他者表現の治療的機能— 芸術療法, 21, 46-54.
- 馬場史津 (2005). 母子画の基礎的・臨床的研究 北大路書房
- Buck, J.N. (1948). The H-T-P Technique —a qualitative and quantitative scoring manual—. *Journal of Clinical Psychology*, 4, 317-396.
- (バック, J.N. 加藤孝正・萩野恒一 (訳) (1982). HTP 診断法 新曜社)
- Gillespie, J. (1994). *The Projective Use of Mother-And-Child Drawings: A Manual for Clinicians*. New York: Brunner/Mazel.
- (ジレスピー, J. 松下恵美子・石川 元 (訳) (2001). 母子画の臨床応用 —対象関係論と自己心理学— 金剛出版)
- Hulse, W.C. (1952). The emotional disturbed child draws his family. *Journal of Child Behavior*, 3, 152-174.
- 橋本秀美 (2004). 描画における共感性に関する臨床心理学的研究 風間書房
- 海塚愛華 (2003). ある抑うつ神経者に適用した描画物語相互吟味法 山口大学心理臨床研究, 3, 31-38.
- Knoff, H. M., & Prout, H. T. (1985). *Kinetic drawing system for family and school: A handbook*. Los Angeles: Western Psychological Services.
- 近藤孝司 (2005). 描画法での対象関係・対人関係のアセスメント 中京大学大学院心理学研究科修士論文 (未公開)
- 近藤孝司 (2006). 描画法における対象関係のアセスメントの検討 —変法 S-HTP を用いての検討— 日本描画テスト・描画療法学会第 16 回大会発表論文集 p48.
- 近藤孝司 (2007). 描画法による対象関係のアセスメント —S-HTPP に描かれた人物像間の内容・形式面への検討— 日本心理臨床学会第 26 回大会発表論文集

p307.

Koppitz, E.M. (1968). *Psychological evaluation of children's human figure drawings*. Orlando: Grune & Stratton.

Machover, K. (1949). *Personality Projection in the Drawing of the Figure*. U.S.A.: C.C.Thomas.

(マッコーバー, K. 深田尚彦 (訳) (1998). 描画心理学双書① 人物画への性格投影 黎明書房)

松下恵美子・石川 元 (1999). 母性意識と母子画に描かれた対人表現との関連について 臨床描画研究, 14, 43-55.

三上直子 (1995). S-HTP 法 —統合型 HTP 法による臨床的・発達のアプローチ— 誠信書房

田畑光司 (2006). 描画テストに関する基礎的研究 —大学生の S-HTP 法— 埼玉学園大学紀要人間学部篇, 12, 111-119.

高橋雅春 (1974). 描画テスト入門 —HTP テスト— 文教書院

田中志帆 (2007). 小・中学生が描く動的学校画の発達的变化 心理臨床学研究, 25, 152-164.

(受理年月日 2008年9月28日)